

利用券発行状況について（松下）

利用券発行状況について

松下 孝昭

県立文書館が昭和六十三年十月に開館してから一年以上を経過した。この間、同じ建物に入っている県立図書館に比して、知名度が低いとか、何となく近寄り難い雰囲気であるとかいった声を耳にすることがある。今後、県内の歴史資料センターとしての役割を前面に押し出し、利用状況を高めていくためにも、ここまでの利用者の統計を整理してみることは決して無駄にはならないであろう。

当館では、資料利用者に対して一年間有効の利用券を発行して

第1表 月別利用券発行状況

	男	女	計
63/10	30	6	36
11	41	13	54
12	41	11	52
元/1	13	2	15
2	12	1	13
3	19		19
4	15	3	18
5	11	3	14
6	10	1	11
7	11	3	14
8	10	2	12
9	8	6	14
10	16	2	18
11	13	2	15
12	19	6	25
計	269	61	330

第2表 地域別利用券発行状況

〔県内〕			〔県外〕					
郡市名		人 数	郡市名		人 数	都府県名		人 数
広島市	中 区	56	大 竹 市	1	山 口 県	7		
	東 区	22	安 芸 郡	17	東 京 都	7		
	南 区	61	山 県 郡	5	神 奈 川 県	5		
	西 区	33	高 田 郡	5	島 根 県	2		
	安南 佐区	12	佐 伯 郡	3	香 川 県	2		
	安北 佐区	8	賀 茂 郡	2	京 都 府	2		
	佐伯区	17	豊 田 郡	2	岡 山 県	1		
	安芸区	14	深 安 郡	1	鳥 取 県	1		
呉 市	13	比 婆 郡	1	佐 賀 県	1			
廿日市市	10	計	298	大 分 県	1			
東広島市	7				大 阪 府	1		
福 山 市	4				愛 知 県	1		
三 原 市	3				アメリカ	1		
三 次 市	1				計	32		

いるが、以下では、昭和六十三年十月から、現時点で集計のできている平成元年十二月までの一年三か月分の利用券発行状況を紹介することにした。もとより、利用券を作ったものの、以後一度も来館されない方もいる一方、毎日通ってこられる方も利用券発行という点では一件と勘定され、また、開架図書のみ利用には特に利用券は発行していないなど、資料利用状況を直接反映したものではないが、おおよその傾向はこれによって把握しうると

第3表 年齢別利用券発行状況

	男	女	計 %
～19	15	10	25(7.6)
20～29	101	38	139(42.1)
30～39	42	4	46(13.9)
40～49	40	5	45(13.6)
50～59	16	3	19(5.8)
60～69	34		34(10.3)
70～	21	1	22(6.7)
計	269	61	330(100)

考えられる。

さて、第1表は、月別の利用券発行状況である。開館当初は、当然初めて来館される方ばかりであるので、発行枚数は多くなり、全体の四十三パーセントに当たる百四十二枚が昭和六十三年十月から十二月の間に出版されている。翌

一月以降は、ずっと十枚台に安定し、十二月になって再び顕著に増加している。前年に発行したものが期限切れとなったために再申請されてくるというケースによることが推測されるが、他の要因もあり、後に述べたい。

次に、利用券申請者を地域別に見たものが第2表である。広島市のみで全体の六十七・六パーセントに当たる二百二十三人を占め、特に地理的に最も近いためか、南区と中区が群を抜いている。それ以外でも、呉市・廿日市市・安芸郡など比較的広島市に近い地域が多くなっており、より遠方の方々にいかに利用の便宜を供し、文書館の積極的な活用を促すが課題と言える。県外では、広島県を対象とする研究者や、広島県出身で県外の大学に通う学生が比較的多いようである。

利用券発行状況について（松下）

第4表 職業別利用券発行状況

	会社員・ 新聞記者	自営・ 農業	公務員	教 員		学 生		無 職	計
				高校等	大 学	大学等	院 生		
63/10	6	1	7	1	4	7	4	6	36
11	5	3	4		6	21	3	12	54
12	8	1	11		4	21	4	3	52
元/1	5			2	1	4	1	2	15
2	1		1	1		4	1	5	13
3	3	1	5	2	2	2	3	1	19
4	6				1	5	1	5	18
5	5		1			4	2	2	14
6	1		2	1	1	3	1	2	11
7	1	1		2	2	5	1	2	14
8	2		1	2		5	1	1	12
9	1			1	2	8		2	14
10	3	1		2	1	4	1	6	18
11	2	1			1	3		8	15
12	1	1	2			15		6	25
計	50	10	34	14	25	111	23	63	330
(%)	(15.2)	(3.0)	(10.3)	(4.2)	(7.6)	(33.6)	(7.0)	(19.1)	(100)

利用者の年齢では、十一歳の小学生の女の子から、最高齢の方は八十二歳に及ぶまで、多岐にわたっているが、年代別に分類した第3表に見られるように、二十代が最も多く、これに十代を合わせれば全体の約半分がこれらの若い層からなっている。

この層の多くは大学生であるが、その傾向を探るため、職業別

利用券発行状況について（松下）

で分類した第4表は、月毎の発行枚数も示した。会社員・教員・院生・無職の人たちは、月毎に大きな変動は見られないのに対し、学生は、年末に集中する傾向が顕著である。平成元年十二月の場合、前年の利用券の期限切れによる再申請者が多いのかと調べてみたが、そうではなく、全員新規の者であった。言うまでもなく年度末レポートの作成のためであり、とりわけ平成元年十二月の増加は、地元の大学の国史演習で出された課題に関する調査のために文書館を訪ねてきた学生が多かったことによるものである。

一方、六十歳以上の方（その大部分は無職）は、当初予想していたほどには多くない。しかし、郷土史講座などではこの年齢層の参加が圧倒的に多いだけに、受講というなかば受け身の姿勢から一歩踏みだして、資料の閲覧請求という文書館の一層能動的な利用にまで進んでいただくような配慮をすることも、今後の文書館としての検討課題であろう。

以上、利用券発行状況と今後の課題を述べてきたが、これからもうこうしたデータを積み重ねていく一方、併せて、閲覧請求資料・複写申請資料・展示観覧者数などの分析も行う必要があるものと考えている。これらについては、機会をあらためて行いたい。

（まつしたたかあき 研究員）